

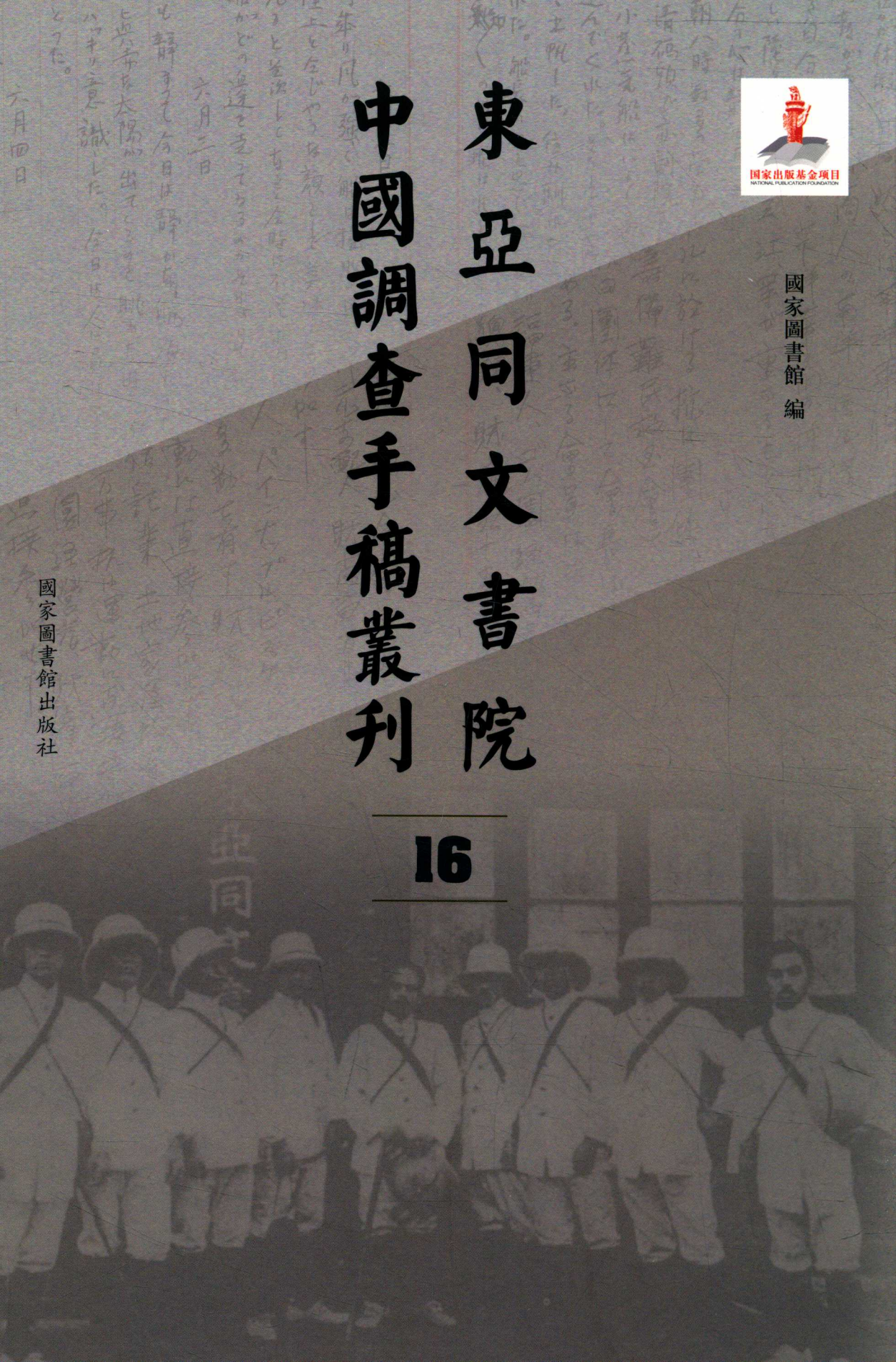


國家圖書館編

# 東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

16

國家圖書館出版社





國家出版基金項目  
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館  
編

東亞同文書院  
中國調查手稿叢刊

---

16

---

國家圖書館出版社



# 第一六冊目錄

昭和三年（一九二八）旅行日誌（第二十五期生）

田中香苗

第十五卷第一編

.....一

金澤伍一

第十五卷第二編

.....五五

芥川正夫

第十五卷第三編

.....九九

小坪昇三

第十五卷第四編

.....一七五

引原二郎

第十五卷第五編

.....二四三

吉田金四郎

第十五卷第六編

.....三一

太宰守

第十五卷第七編

.....三九七

昭和四年（一九二九）旅行日誌（第二十六期生）

百枝辰男

第一卷

.....四三七

橋口有恒

第二卷

.....四七九

旅行日誌

北島經濟調查班

田中香苗

世宗憲皇帝  
御製  
詩集  
卷之二十一

第五卷

調査旅行日記

一

北條省立図書館蔵

中川 永清

九月廿九日(晴)

朝のまばゆい太陽を受けて、校内を出ずる日の高鳴る夢多し。胸よ。  
同行八人、南上して旅立つ日。午後二時、カストム・インエイで白山丸  
への最後の特等車が、上坂水を煙をはいてゐる。

山嵐吹ケ吹ケ……

毎年、旅を送る日に歌合の水、歌合、新太のあと歌合した。別院長  
先生、馬場先生、其他多量の先生に見送られ、今更乍ら感傷的  
な別水のシーシーを見て、涙は出て行く。バツトの建物が一ツとあって、  
白山丸の三手室に上りし暑い空気を呼吸する頃、一瞬の切ない感情の八

人の胸にせまる。

上役、マストの上で日を生掻いてゐた。

ケビレは色んな人の足と草が踏まれた。

黒い兄弟は日本旗の甘かつた、ノートンギムのクワシエトは、パイオリンが上りである。夜更け、眠り、酩酊の境地にひたうせた。彼は、~~お~~おれより行く。

九月三十日。(晴)(雨)(曇)

いす里、いぬ、オゾーを心行くまで呼吸した。温かい風。

お島が遠くに見えてゐた。静かではあるが、大きなうねりの来て、時々

南り魔のうねりや雨の意をなしていたが、一日中、雨の雨をうねりたと言

う事もちのつた。落着いた気分である。ケビレは人種や階級的なべール

をなくして、ゆるゆるはるはるのうちに防意なく揺るがした。静かに眠る旅！

日中の風に吹き飛べ、イルカのように、マストを吹く風に揺られてゐた。眠は

城のうた、波の山にふかしく、旅をさるる水、南海の波は美しい。

五月廿一日

日生波へ行く老人の猿族に目の覚めだ。十里の彼は取宝の道化である。

雨は晴れて、美しく青空の世限に續いて、澄人を青悔るその境界は、沖にあり白帆によつてはつきりさ、水に位にある。公の悔を悔み通つておもしろい。

ナポリ（行くと言ふ青世の水はシヤム人であつた。彼は生快な式に於て、言葉を於て定まらば日本人である。ふい、す、星い顔色に日本国籍、洞窟の目を止めしめ、処のあるだけである。他日本人である日本浪の甘い人に会うとは懐しいものである。東洋の兄弟が、懐しく日本を故郷の如く考へてゐる右様は限りなく私を欲せむ。人種の一万里長城を世界の隙を得たら、我々は人に幸福を、生易を現実を全うし得る事だろう。此を見聞の日本になつた日、五里の御水の中、玉階による日本



事務負をいさうりてぬ。先か我は抗暢を英流に降参した。廣東  
の世は物凄いい。支那の近代女性は何れ故である。支那の旧制から一歩  
を踏み出す意図は、とて水、物凄いい。彼世はロレドレ一行のたえうた。そして  
彼世手は先か上海からこのオールン迄の特別の手やけ付を贈りつけた。  
然るに三手の部から三手。飯を喰はさ水た。それをも今年財計のたけで  
事務負に努めるふあつた。此の事務負は、持玉の部から手やれと  
彼世手おにりや一つしてあるし。今んちこそ人々を言うのは重だ。一休に  
支那人は日本飯の喰ひないおに<sup>三手</sup>出来に出来るが、あつた、えう思つてゐた。  
。女人より論理のちうさる弁解を苦しくしぬた。彼世手は事務負長に  
會はせろ、貨錢の払戻ししろと抗おする。事務負をりや一つしてあるものを  
廿一の逃け口として弁解してゐたか結局敗けてしまつた。

我々ハ名々批評家達に色々に批評した。女らしくない、生意氣な  
と云う流の大部である。私は人を偏見として腹ましく思ふ。何と理路

習俗たる彼女の主張ではないか。所謂淑女の女性を。ヘトするゝゝに女性  
の体たるを重んじまじで白眼をあくる。テストテストの男はうけ、女性の体の叫  
びをきけ化す、要化する。まゝとこの降る女、要味はあふすゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ある、その外人干渉とまゝと、何れも身まい日本人諸君、一寸はあの女に  
見習ふなへ。本女にの願ふたち、婦人をハーレムから解放せよ、いさゝと（あ  
の時もまた世にのけあはないうたゝ。彼女のハーレム。男はうけは土庫まゝであ  
るゝゝを止めねばならぬ。

六月一日、

未明、船はウクトリや湾に入る。

雨まやのピーリをはるゝゝに過ぎる。新緑の山、緑の地に白亜館は地上  
の星である。蒼蒼とした海、汽船の跡、海岸のぼろぼろ上つた五六席の建  
物、山と水と緑と建物と、青はば好まを懐ひあり。全体の好である。  
エトゝゝの緑は憎く。KAO LOONG に行くゾリーか珍しい。

煙館ヲテテ降りし雨の中を、つうく、ピーにつく。二匹の白馬車で  
二階、電車を追ひ掛りて、<sup>津子</sup>の湯うら堂気の中に行く。沃初字真に  
出て来ると博子い宿の四階の部屋は、慌を目下に見下しあふ。

水方の水はさかつた。<sup>おの</sup>雨期に入らな昨午以来の断水で、時子に水せぬと  
まつた。いよいよしき空気をたまうまゝ、我々を陰気にした。安南へ行く  
何島、山あり、お上手とトうして半日を過し、午後には本館領  
事館へ行く。

六月二日、

今日もお雨である。

午前中、カナダ汽船、アメリカ領事館、正金銀行へ行った。比律賓  
への汽船貨、香港、弗里、そのうち、大田口へ、水た。やあ、悔事三十一  
弗五十仙のウ、松松いとして出さう、たいさへ、南口へ、水た、我々である。

午後三時の細石二氏を訪問、その後、自分一人にて後、吉之助氏を訪

向した。そこで、いんすの班頭と共に木村元止氏に由馳走いそいで帰る。  
午後四時頃より香港島をドライブした。人々に財政を切りつめても  
旧人員増を増しても香港島の一周はすのまものだと思つた。爽快な気分  
でドライブによる、ヒュートリヤの一周はエトエトの大さう歓迎であつた。

先づ、旧屋より夕暮しの微風を受けてヒュートリヤ市の中心よりウエ  
ストの支那街から緩んだ勾配を上つて行く。眼下に九龍を、  
浮ぶ軍艦を海に船を見下して、雨で洗われたアスファルトの道を或は下  
り或は上り、時に急勾配を船を、南方へ急を、反対側より来り、自  
車との衝突を恐れ、水つ、前進する。膝をよす静まれ、そしてドライブ、ス  
ローリ。でも、足踏手は煙草十巻（て矢）船に船は、香港島を行  
向かうかに夕陽が、雷火のやうに輝いた。足下の蒼海と屹立する島、峻  
たる山腹を飾る建築、字真珠は停車場せいのてスナフのす。

と大いに入らして、濃い青色の海に、帆船の群を、帰る。夕陽が

弱く帆帆のマスに照つてゐる。遠くに見下す旧香港の跡は五六層の建物  
が古風な感傷をさそふ。薄もやせまゝ山頂から瀟々落々。リパルスへエイ海水

浴場では二人が暑うたうする夏とい日に泳ぐものがある。香港おそいの  
横いブルフオノ英い外人夫婦がある。貯水池では満ちた水でも、砂を捲く  
る瀟々といふた。砲台を過す。イーストエド。ハフビイのアーシェイを過す  
。湾仔のいめいめした家といふ水頭、雨は鉛色に人々と魚の白濁軍に  
降るよな。

夜の主人の招待により支那料理店、武昌樓に行く。相模好きで親中  
の主人と、海軍士人上りの老翁とはや院おまじ、よく我手をもてこりこれた。

六月三日（晴）

天気漸くよし、昼食後揃ってピーク上りをする。

カーにカーでより、そのRutland Roadを繞つた。一千二百呎の山腹  
を降りつたあうにセメント土の道（の繞うされて、ビクトリアの所は眠下にある。

久し振りに逢ふ大陽の海に所ん山に新やみある。あゝこゝにそれだけ  
 満足であるのに、微風は絶えず吹く。外人の夫婦はウバ車を押して  
 くる。所々、字真まをそこ。ピークあたりの処にウバつて来た。それからピーク、ロー  
 とすると兵舎と砲台がある。字真様の携帶は許されてゐた。ピーク、頂上  
 雲が班の自衛車を覆つて、ハッピーウアレーりかゝる坂を下つた。

夜、先輩の歓迎會を行く。陶々仙り、広東料理の舌鼓を打つ、先  
 輩の好意を嬉しく思つた。先輩には先輩の凡俗性があった。

お見舞はきこふスパーンデインである。乳が英七種の各々に人へんを  
 のちの四日はハッピーウアレーりて大觀岳、式の行はれる筈である。

四月十四日

朝来、夜に行儀はハッピーウアレーりより香港の上とトコおの如く船中でゐた。  
 天気が水が水大觀岳、式はあつたらしい。封岸の石橋から見た夜の香港は  
 あゝと美しかった。

香港を別水の日。九龍地方見物。夜更に別水を告げて、港歌合戦  
に参り、安否傳信に忙しうた。別水に参つて香港の問題にある処の香港  
の将来について寸草を見よう。

[illegible]